

セッションⅢ 第1分科会記録

幼稚園、小学校における支援の工夫と連続性を考える 「発達障害のある子どもへの学校教育における支援の在り方に関する実際的研究 －幼児教育から後期中等教育への支援の連続性－」から

研究概要の報告及び分科会の趣旨

国立特別支援教育総合研究所 笹森洋樹

小学校における支援の工夫

研究報告：国立特別支援教育総合研究所 小林倫代

実践報告：埼玉県和光市立第五小学校 教諭 樋口普美子 氏

幼稚園における支援の工夫

研究報告：国立特別支援教育総合研究所 久保山茂樹

実践報告：茨城県取手市立藤代幼稚園 園長 伊藤こずえ 氏

指定討論「支援の連続性」

青森県総合学校教育センター 指導主事 飯野茂八 氏

島根県松江市健康福祉部子育て課 指導主事 秦 昌子 氏

はじめに、研究代表者・笹森総括研究員より、研究概要と分科会趣旨の説明を行った。

その後、小学校、幼稚園における支援の工夫について、それぞれ研究報告と実践報告が行われた。

＜小学校における支援の工夫＞

【研究報告：国立特別支援教育総合研究所 小林倫代】

平成 22 年度に行った「学級担任を対象にした取り組み」として、学級サポートプランの小学校での実地適用と NISE スタッフによる授業参観等による「学級サポートプラン」の活用と有効性の検証に関し、クラス全体を対象とした取り組みと気になる子どもを対象とした取り組みとそれとの成果、研究に参加した担任教員の意識の変化等につき、サポートプランを用いて作成したデータ等を参考しつつ紹介した。

平成 23 年度に行った「特別支援教育コーディネーターを対象とした取り組み」として、サポートプランを活用した特別支援教育コーディネーターの活動と、NISE 研究員の授業参観と協議により、サポートプランが授業改善につながったことや、サポートプランの波及効果について説明した。

【実践報告：埼玉県和光市立第五小学校教諭 樋口普美子氏】

研究協力校における研究主題「主体的に考え実践する児童を育てる指導法の工夫と改善～特別支援教育の視点を活かした国語科の実践を通して～」、学級サポートプランの活用方法（学級サポートプランの説明→実施・解釈→共有→指導案検討→検証→成果・課題の共有）、実施学年（2年・4年・6年）それぞれにおけるクラス全体／支援児童への指導の工夫、授業におけるクラス全体・支援児童・教員の変化、学級サポートプラン活用における教員の変化、今後の課題等について、指導案や教員作成の教材、ICT活用等の実例を示しつつ発表があった。

＜幼稚園における支援の工夫＞

【研究報告：国立特別支援教育総合研究所 久保山茂樹】

保育参観や幼稚園教諭との協議等によって収集した、学級全体の指導計画と個別の指導計画、学級全体への配慮や工夫（①見通しをもたせること、②視覚的情報の活用、③気持ちを立て直す空間の用意、④幼児同士の支え合いの促し）、学級全体への支援内容の変化、就学に向けての支援等の情報を、実践例の写真等を交えて紹介し、小学校での「特別な支援」は幼稚園では既に実施されていることが多い、幼児教育の基本「一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した」指導は特別支援教育の理念と一致する、幼児教育と小学校の特別

支援教育は共通する部分が多い、とまとめた上で、今後の課題(幼稚園で行われている支援の小学校以降でのより一層の活用、私立幼稚園に関連した課題)について述べた。

【実践報告:茨城県取手市立藤代幼稚園園長 伊藤こずえ氏】

一人一人に応じた環境の工夫(園生活に慣れる時期→友達や活動への興味を広げて→コーナーを外してみんなと一緒に)、自分のクラスを意識させるため設定したクラスから出していく時の約束事の説明、実践事例として、発表会に向けての取組(教師の配慮、活動の流れ、対象幼児の気持ちの変化等)の紹介が、教材や記録用紙、週案等の資料や活動の写真を参考しつつ行われた。

最後に、小学校への円滑な接続をするために必要な事項(市教育委員会との連携、小学校の教育活動についての理解を深める、保育内容の工夫)についての提言があった。

<指定討論「支援の連続性」>

指定討論者の飯野指導主事より、接続期における保護者・関係機関との連携についての取組や課題等につき質問があり、伊藤園長からは、保護者との信頼関係づくりに関して、年2回の個人面談、園庭開放の際のコミュニケーション、別途行う個人面談を重ねること等、つなぎに関して、市が5月頃行う就学相談について園からもすすめること、就学支援シートの作成、小学校のクラス編成会議におけるお願い等が、樋口教諭からは、入学前の事前面談でこれまで受けてきた支援とその結果やお子さんの得意なこと等について聞き、入学前にできる簡単な準備について提示すること等、卒業期における中学校側と保護者・本人の面談とそこで必要な情報を伝えるためのサポート等、課題として、保護者が関わってきた関係機関にどのような感情を持っていたかを把握しにくいこと等が挙げられた。

さらに飯野指導主事より、幼稚園において伝えたいこと／小学校において知りたいことについて質問があり、伊藤園長からは、幼稚園生活で子どもが困ったこと、つまずいたこと、友達関係でトラブルになりやすそうなこと、樋口教諭からは、集団での学習・生活が難しいと思われる特性をもつ子どもにつき支援とその結果、子ども同士の相性、家庭への支援・配慮が必要な子どもの情報等との答えがあった。

指定討論者の秦指導主事からは、支援のベースとなる学級や集団を形成するまでの工夫につき質問があり、伊藤園長からは、友達関係が広がるような活動を取り入れていること、樋口教諭からは、個に応じた支援の基盤となる、互いに認め合い互いに伸びていくクラス文化を築くために大切にしていること(先生に認められているという感情を子ども一人一人に持たせる、皆で作ったルールを明示し徹底的に守る、互いに助け合って成長できる仕組み作り、一人一人考えが違うことを理解させる、皆が違うことに気づかせる)の紹介があった。

秦指導主事からはさらに、つなぎにおける校内委員会やコーディネーターの役割に質問があり、伊藤園長より、市の特別支援サポート事業の一環としての幼・保・小・中が中学校区ごとの情報交換への参加等、樋口教諭より、入学期の保幼小の連絡会議や入学前の小学校との子供の交流、中学との事前面談や情報提供のための資料、中学校に心配があればコーディネーターと管理職で話しにいくこと等の紹介があった。これに対し秦指導主事から、支援サポートファイルを活用した松江市の事例につき紹介があった。

<フロアから>

参加者から、個人情報の管理と活用について質問があり、秦指導主事から、学校がもつデータは保護者の同意が前提となっており、教育委員会も関わりながら活用をすすめているとの説明があった。

さらに、札幌市幼児教育センターが行っている、保護者の同意を得たうえでの引き継ぎ会や、幼保小連携マップを作製する等のネットワークを作ったまでの取り組みについて紹介があった。

<まとめ>

最後に、研究代表者・笹森総括研究員より、連携のためには顔をつないでいくこと、直接伝えあうことが大事、トラブルを自分達で解決できる力を育てることが幼児期から大事、というまとめがされた。